

「こわがることをおぼえるために旅にでかけた男の話」にみる 「笑い話」の構造とその意味について

07K069 渡邊紋優子

はじめに

「赤ずきん」や「白雪姫」、「蛙の王様」などで知られるグリム童話は、母から娘へ語られる物語であるため、成長物語や教訓物語が数多くある。その中では、神通力を持つ女（魔女）や小人、そして手段としての魔法が溢れしており、大抵の場合、貧しくも美しい主人公が試練を乗り越え、成長し、幸せな結婚に至る。

しかし他方で、グリム童話には魔法などの非日常の要素を持ちながらも、単なる夢物語とはいえない、ユーモアに満ちた「笑い話」も多く収められている。こちらは日本ではあまり知られていないが、「笑い話」に分類される童話は、グリム童話に収められた200編の内、95編に上るといわれている。⁽¹⁾ これは興味深いことであり、本来のグリム童話が、「語りで読まれる昔話」という性質をもっている故のことではないかと思われる。気軽に冗談のように語られ、日々の鬱憤を晴らしてくれる、そういう役割も昔話にはあり、その役割が、子ども向きにするために文学的な手が加えられているとはい、昔話の収集本であるグリム童話にも受け継がれている。

ここでは、グリム童話の中の「笑い話」について考察したい。そして、多くの「笑い話」の中から、「こわがることをおぼえるために旅にでかけた男の話」を取り上げる。この物語を選んだ理由は、この物語が私にとってグリム童話における初めての「笑い話」であり、また、「笑い」とともに読者の思考や価値観の転換を巧みに構造化している印象深い作品でもあったからである。

この作品の特徴を明らかにするために、比較対象として日本の御伽草子である「物ぐさ太郎」を取り上げる。「物ぐさ太郎」は、中世から近世初期に作られた物語草子類のひとつであり、特に民俗学では、昔話からみる民衆思想の研究対象として、何度も取り上げられてきた。そしてこの作品の主人公、物ぐさ太郎の行動やあり方は、「こわがることをおぼえるために旅にでかけた男の話」の主人公との類似がみられるからである。分析方法として、人類学者の小松和彦による「物ぐさ太郎」の分析⁽²⁾に依拠し、この分析を「こわがることをおぼえるために旅にでかけた男の話」にも当てはめ、比較を試みたい。

1. 嘲笑される主人公

まず、「こわがることをおぼえるために旅にでかけた男の話」から、主人公が「ぞうつとすること」を習うために旅に出るまでのあらすじを紹介しよう。

あるところに息子が二人いた。兄の方は物分かりがよく器用であったが、弟の方は何も覚えられず、仕事もまるでできない厄介者で、父親を心配させていた。

ある時父親は弟むすこに、自分一人で食べていくために何か覚えるよう諭すが、弟むすこが、「自分だけが分からぬぞうつとすることを覚えたい」と告げるのを聞き、いよいよ呆れ返り、これを教会の坊さんに相談する。坊さんはそれならば、ということでむすこを預かる。

むすこは鐘つきの仕事を与えられ、夜中に鐘つき堂にのぼる。そこから見える階段には、むすこをぞうつさせようと、幽霊の格好をした坊さんがいたが、むすこはまったく怖がらずに、その者に返事をするよ

う、三度問いかける。しかし返事がないので、むすこは坊さんとは気づかずに、彼を階段から突き落してしまう。

そのため、むすこはこれを聞いた父親から勘当されてしまい、「ぞうつとすること」を覚るために、父親から渡された50ターレルのお金のみを持って旅に出ることになる。

これが物語の冒頭である。弟むすこは兄と違い、まるで何もできない、いわゆる「馬鹿息子」であり、なんでも器量よくこなす兄と対比して描かれている。このように兄弟、あるいは姉妹で性格が対比されるのは、グリム童話ではよくみられる手法である。大抵の場合は、「灰かぶり」のように、主人公のやさしさやつましさ、賢さといった、良い方の性格がより強調される。しかしこの場合は、常に仕事を任せられる兄と対比することで、むしろ弟のどうしようもなさがより際立たされているといえる。その極めつけが、自立するために「ぞうつとすること」を覚えたい、という弟の台詞である。ここで読者は、父親が呆れ返るように、またこれを聞いた兄が、「まあ、なんということだ。おとうとのやつは、よくよく、ばかだなあ」と笑うように、弟をどうしようもない馬鹿息子として嘲笑してしまうのである。

次に、「物ぐさ太郎」の冒頭をみてみよう。なお、「物ぐさ太郎」については、京都大学電子図書館の現代語訳⁽³⁾を参考にした。

あるところに物ぐさ太郎ひぢかすという大変ものぐさな男がいた。物ぐさ太郎は竹を四本立て、簾をかけただけの家に住み、商売も田畠仕事もせず、人から食べ物を恵んでもらいながら一日中寝て過ごしていた。

ある時、物ぐさ太郎は人から餅をもらったのだが、そのひとつを道に転がしてしまう。物ぐさ者の物ぐさ太郎はそれを拾うこともせず、三日後偶然通りかかった地頭に拾ってくれるよう頼む。物ぐさ太郎の大変な物ぐさぶりを見た地頭は、物ぐさ太郎に毎日二度の食事と一度の酒を与えるよう、領内にお触れを出す。人々は理不尽だと感じながらも、領地から出て行きたくはないのでその通りにする。

それから三年後、国司殿より働き手を一人京に来させよ、というお触れが出、人々は嫁探しの名目で物ぐさ太郎を上京させる。

この冒頭部分だけで、主人公物ぐさ太郎の面倒くさがりぶりが相当なものであり、彼が人々から厄介者扱いされていることが充分に読み取れる。彼は、「こわがることをおぼえるために旅にでかけた男の話」のむすこと比べても、村という共同体からずつとはみ出しているようにみえる。読者は、この通常考えられないほどの物ぐさぶりをみて、「こわがることをおぼえるために旅にでかけた男の話」と同じように、その行動に呆れ、その一方で彼を嘲笑するのである。

2. 「笑い」の意味

ここで少し「笑い」について触れてみたい。小松和彦によれば「笑い」とは、「ある秩序にしたがって思考していた読者が、突然に別の秩序に沿って思考することを迫られ、そのため思考の平衡状態が混乱し狂わされてしまったために、方向性を欠いたエネルギーが放出したもの」⁽⁴⁾である。つまり、物語を読むという観点からみると、読者にとって予想外のこと、読者の属する世界で常識となっている考え方や行動にそぐわないことが物語の中で起こると、読者はそのズレに対応できなくなり、その結果として笑いが起きるのである。しかし、たとえ読者と物語との間で、相互に了解された世界が作られ、物語の中の人物が十分に予想できる笑いの行動を取ったとしても、読者が笑ってしまう場合もある。しかしこの場合においても結局は、読者が、物語中の人物の行動は規範外の行動である、と認識しているために笑いが起きているのであり、読者の認識する常識とのズレという点では、笑いのあり方に変わりはないだろう。

この笑いの定義は、そのまま「こわがることをおぼえるために旅にでかけた男の話」と「物ぐさ太郎」に

も当てはまる。私たちがむすこを笑ってしまうのは、彼のやる気はあるように見えるが仕事ができないというところではなく、「ぞうつとすることを覚えたい」という彼の突飛な考えに対してである。そしてその返答はただ突飛なだけではなく、自立の手段として「ぞうつとする」という現象を捉えているために、私たちは彼を常識外の存在として見下し、嘲笑するのである。そこには「ぞうつとすること」では飯は食えないのだという現実的で冷ややかな視線がある。そして物くさ太郎にしても、一歩先に転がった餅すら拾おうとしない面倒くさがりぶりが私たちの常識をはるかに超えており、そのために思わず笑ってしまうのである。そして仕事もせずに人々に養われているというのに、なお一日中寝ているという彼の姿に呆れ、ここでも彼を自分たちよりも下の存在とみなして嘲笑するのである。そこにはどちらも、社会から外れた彼らの行動に照らし合わせて、自分たちは社会的常識も持っているという優越性がある。

この主人公が社会から外れているというあり方を、小松は、政治学的・構造論的構造から捉えて、「潜在的な形を取った反秩序的・反社会的行動の一つの表現」⁽⁵⁾としている。確かにむすこと物くさ太郎のあり方は、社会に反するものであり、たとえ人々が相手にしないとしても、社会の秩序を乱すものといわざるをえない。つまり、共同体にとって《悪》の存在である。「こわがることをおぼえるために旅にでかけた男の話」において、父親がむすこを追い出すこと、また「物くさ太郎」において、百姓たちが物くさ太郎を上京させることは、それゆえ共同体からの《悪》の排除といえよう。人々は、自分たちの社会の秩序を守り、円滑に日常を送るために、反社会性を持つむすこと物くさ太郎という、脅威すべき存在を社会の外に押し出したのである。すなわちここには、人々が二人をただの厄介者、共同体のお荷物として捉えているだけではなく、潜在的に彼らを、人々を脅かす存在として捉えていることが分かる。二人はそれぞれ、ぞうつとすること（恐怖）を知らず、また権力者にひれ伏したりしないという、恐れを知らない反社会的・反体制的存在である。そうであるならば、私たち読者が彼らを笑ってしまう背景には、単なる嘲笑だけではなく、そのあまりにも自由なあり方に対する羨望や感心、つまり同調者の姿勢がある。社会に対する読者の不満が、社会から外れた二人の行動によって無意識にしろ解消され、日ごろの緊張感が緩和されるのである。だからこそ、私たちは彼らを笑いつつも感心し、期待を持ってその先の行動を見たくなってしまうのではないだろうか。

また、共同体から追い出されるということは、すなわち共同体社会からの死を意味することであり、小松も「物くさ太郎」のその点を指摘している。これは「こわがることをおぼえるために旅にでかけた男の話」においてもいえる。むすこは父親に勘当される際、「生まれ故郷やおやじの名まえは、だあれにも言うんじゃないぞ。きさまのおかげで、おとつあんもとんだ恥をかくからな」⁽⁶⁾と言われている。そのため、彼は故郷も父親も分からない、出自不明の者となって旅に出ることになる。これはまさしく共同体からの死であると捉えることができる。むしろ、もともと生まれや父親の存在が明かされていない物くさ太郎よりも、ここにきてはじめて自身の情報すべてを失う羽目になるむすこの方が、より決定的な死を迎えていたといえるだろう。

3. 「旅立ち」とその帰結

さて、ここまででは、それぞれの主人公が旅に出るところまでについて分析してきたが、二人の主人公の旅立ちが「共同体からの死」という面を持っているのであれば、次には、主人公の旅立ちがどのような帰結に向かって進み、そこにどのような意味があるのかをみていく必要があるだろう。

まず「こわがることをおぼえるために旅にでかけた男の話」の残りのあらすじを追ってみよう。込み入った部分もあるので、あらすじを箇条書きにして、旅立ち後のむすこの経験を整理してみる。

1. 罪人が7人吊られている絞首台の下で一晩を過ごす。その際、7人が死人だと気づかないむすこは、凍えそうな夜中に親切気から、死人たちの体が温まるように縄を解いて下におろし、火のそばに並べる。
（「ぞうつとすること」は学べない）
2. 王さまの許しを得て、悪魔たちが宝を守るお城で、火・ろくろ・小刀つき仕事台を持って三日三晩の寝ずの番をする。
〈一晩目〉
 - i. 黒猫を台にねじで止め、殺す。
 - ii. 火を消そうとするたくさんの黒猫、黒犬を追い払う。
 - iii. 寝そべった寝台がひとりで歩き出し、飛び跳ねたので怒って降りる。
（「ぞうつとすること」は学べない）
〈二晩目〉
 - i. バラバラだった死体が接合し、むすこの周りで遊びはじめる。むすこもその死体たちに混じり、賭け九柱戯をする。
（「ぞうつとすること」は学べない）
〈三晩目〉
 - i. むすこは大男たちが運んできた死体をあたため、生き返らせようとするが、生き返った死体がむすこを殺そうとしたので、追い返す。
 - ii. 長い白ひげを生やした老人と力自慢対決をする。その際、むすこはまさかりで鉄床を幹竹割りにした割れ目に老人のひげを巻き込み、さらに老人を鉄棒で殴る。
 - iii. 観念した老人が、一つ目の宝を貧乏人に、二つ目を王さまに、三つ目をむすこに渡す約束をする。
（「ぞうつとすること」は学べない）
3. むすこが三日三晩の寝ずの番をして帰ったので、王さまはかねての約束どおり、娘である美しい姫を娶らせる。
4. 若王となったむすこは何不自由なく暮らしたが、「ぞうつとすること」を覚えていないことをいまだ不満に思っている。しかし、妃の侍従の計らいで、妃が、寝ているむすこに小魚のいっぱい入った水をかけると、これに驚いたむすこはついに「ぞうつとすること」を学ぶ。

以上が「こわがることをおぼえるために旅にでかけた男の話」の後半のあらましである。一見、むすこは姫を嫁にすることで王になれたので、そこで物語は帰結するかにみえるが、物語は最後までむすこの旅の目的である「ぞうつとすること」を学ぶ一点にこだわっている。これは何を意味するのだろうか。この疑問を念頭に置きながら、今度は「物くさ太郎」の後半を追いながら、前半同様、両者を較べてみよう。

上京した後も、物くさ太郎は相変わらず不潔だったが、真面目に働いたので長らく召し使われた。しかし肝心の嫁は見つからず、そのため物くさ太郎は、道端で女を誘拐する辻取を決行する。

なかなか気に入る女は見つからなかつたが、ある日ついに嫁にしたいと思う美しい女房を見つけ、強引に連れ去ろうとする。物くさ太郎に恐れおののいた女房は、謎かけをしながら逃げようとするが、物くさ太郎はこれを次々と解いてしまう。

しかしそれでも女房は何とか逃げ切り、物くさ太郎から行方をくられます。だが物くさ太郎はあきらめず、

女房の出した謎から、その日のうちに屋敷を突き止め、屋敷に侵入する。

物ぐさ太郎を見た女房は恐れて部屋に閉じこもる。しかし、翌日追い出すことにした物ぐさ太郎の歌のうまさ、教養の深さに感服し、契りを交わす。

晴れて嫁を得た物ぐさ太郎は、清潔になって日に日に洗練さを増し、また歌の才能も開花し、誰よりすばらしい人物となる。その評判は瞬く間に広まり、それを聞きつけた帝のもとに参内することになる。

物ぐさ太郎の歌のうまさに心酔した帝が、出自は分からぬという物ぐさ太郎の系譜を調べさせると、何と物ぐさ太郎は天皇の孫であることが判明する。

これによって物ぐさ太郎は信濃の中将となり、女房とともに、かつて物ぐさ者として過ごした故郷へ帰る。

そこで物ぐさ太郎は、立派な屋敷に多くの家来を持つという、以前と全く反対の生活を手に入れ、たくさんの子どもにも恵まれて、120歳まで長生きする。その後、物ぐさ太郎は、おたがの大明神、女房はあさいの権現という恋愛の神様となった。

こちらの物語も、その帰結は嫁を得ることにはなく、地位と出自を手に入れ、故郷に帰るところにある。しかし、そもそも物ぐさ太郎は、曲がりなりにも嫁探しの名目で上京したのだから、嫁を得たところでめでたしめでたし、となても良いはずである。しかしここでは、物ぐさ太郎の、天皇の孫という非常に高い地位である出自が判明し、そしてそれによって共同体への帰属を果たすところで、物語の帰結を迎える。ここには作者の何らかの意図が込められているとみて良いだろう。しかもそれは、「こわがることをおぼえるために旅にでかけた男の話」の帰結の意味と類似した意味が隠されているように思われる。なぜなら、この二つの物語の展開や構造には多くの類似点が見られるからである。

4. 主人公の反社会性と「再生」

「こわがることをおぼえるために旅にでかけた男の話」では、絞首台の下で眠る際、むすこは「死人と気づかなかった」という読者の想定外の認識を示すが、死人たちが寒いだろうと思って火のそばによせるという、優しい一面をのぞかせている。相手が死人である、という点を除けばこの行動は何ら常識外の行動ではないといえるだろう。他方、「物ぐさ太郎」においても、物ぐさ太郎は上京した途端、打って変わって眞面目に働き出す。これはそれまでの太郎から考えるとまるで似つかわしくない行動ではあるが、社会に溶け込める行動であることは間違いない。

だが、この次の場面で彼らはまたしても反社会的と取れる行動を展開する。

それが「こわがることをおぼえるために旅にでかけた男の話」における城での悪魔退治の場面であり、「物ぐさ太郎」における女房の辻取の場面である。「こわがることをおぼえるために旅にでかけた男の話」では、対象が悪魔であるため、退治するのは当然のようにも感じられるが、しかし、朝が来るごとにやってくる王さまに対するむすこの返答をみていると、むすこが悪魔を悪魔と認識していないように思われる。むすこが城で出会うのは「黒猫」、「黒犬」、「こわらしの男」、長い白いひげを生やした「じいさん」等で、悪魔と明言されてはいない。これは、その前の部分で「城には悪魔がいる」とむすこは告げられており、わざわざ明記せずとも読者には誤解が生じないと考えてのことかもしれない。だが、むすこの王さまへの説明を考えると、あえて悪魔と一言も表現されないのは、むすこの目線でみた表現であるためとも考えられる。そのように捉えると、むすこの突然の暴力性・残虐性は、その寸前のむすこの優しさを吹き飛ばすほどのものである。また、「物ぐさ太郎」に至っては、辻取という行為は明らかな犯罪行為であり、また女房を追いまわす行動も反社会的といえる。

昔話において、登場人物の行動をいちいち犯罪行為と照らし合わせていたら、それこそきりがないが、ここで注目したいことは暴力性それ自体ではない。そうではなくて、もともとの共同体を離れた彼らが、次

の社会では一時溶け込んでいるように見えたところで起こす、突然の暴力性についてである。この点については次のような解釈を試みたい。

つまりこの突然の暴力性は、彼らが「変わっていない」ことを示しているのである。「変わっていない」という意味は、「ぞうっとすること」をいまだに覚えられていないことや、物くさぶりが直っていないことではなく、彼らが反社会性を持った存在のままだということである。私たち読者は、むすこの性格の優しさや、王に対する言葉遣いをみて、彼は案外「普通」の人であるかもしれないと思う。また、物くさ太郎に対しても、眞面目に働きだす唐突さに違和感を覚えつつも、彼が社会にうまく入り込めたと納得する。こうして読者は当初彼らを嘲笑していたにもかかわらず、この様子に前ほど優越感を持つことはなくなる。

だがそこで、突然の反社会的行動がまたもや読者を襲うのである。そこには、社会という共同体の一員になれたと見せかけておいて、実は反社会・反体制の存在のままであることを読者に再認識させる、作者の巧妙な手法があるように思える。実際この彼らの行動によって、彼らを同調者の目で見ていた、社会に対して不満を持つ読者が裏切られることはなくなるし、またこの突飛な行動への唐突な転換は、先述した笑いの定義から考えれば、思考のズレを促すことになり、読者を再び笑いに誘うことができる。しかしそれだけではなく、反社会的行動の中でも暴力性という性質は、特に危険なものであり、それを平然とやってのけるむすこや物くさ太郎はもはや、読者にとって単なる嘲笑の的ではなくなる。

むすこはここでも「ぞうっとすること」を覚えられないが、その行為は笑いの対象ではなく、その社会性の如何を問わず、彼の本質に常人よりも強い精神力があることを示している。実際、城での三日三晩の寝ずの晩は、むすこ以外の誰もが挑戦しても為しえなかつたという事実は、読者や物語の中の権力者を含め、誰もが認識していたことだからである。他方、物くさ太郎においても、女房の謎かけを次々と解き、歌の才能もあるという、これまで発揮する機会のなかつた実力がここで初めて明らかにされており、これによつて物くさ太郎も笑いの対象から外され、一人の傑物としてみられるようになる。読者は彼らの力を前にして、思考の転換、ひいては価値の転換を迫られることになる。

この反社会的行動に伴つて、むすこも物くさ太郎も、美しい嫁を得ることになる。これは、むすこにおける精神力の強さ、物くさ太郎における教養の深さと知性という、隠されていた力による価値の逆転が起つたことの具体的な証として設定されている。それゆえに、どちらの物語も嫁を得ることでハッピー・エンドとはせず、さらに本来の帰結に向かつてもう少し物語が続くのだと考えられる。

物語の帰結はそれぞれ、王となり、妻によってようやく「ぞうっとすること」を覚えさせられる（「こわがることをおぼるために旅にでかけた男の話」）、権力者となって故郷で暮らし、のちに神となる（「物くさ太郎」）というところに置かれている。どちらも最終的には人々から尊敬される地位に就く。これはそれまで出自不明という形で共同体から抹殺され、死んでいた彼らの「再生」といえるだろう。

最後に、「こわがることをおぼるために旅にでかけた男の話」が「ぞうっとすること」を覚えることで締めくらでいる点について考えてみたい。先に「ぞうっとすること」を知らないことが、彼の精神力の強さだと述べた。しかし、物語中の人々や読者に価値の逆転を引き起した今、もはや彼は笑われる対象ではなくなり、それどころか王という権力を手に入れた。それゆえ、「ぞうっとすること」を知らないことによって保証されていた強い精神力は不要になったといえる。その意味で、物語の仕上げとして「ぞうっとすること」を覚える必要があったのではないかと思われる。むすこの反社会性という「火」の部分は小魚のたくさん入つた「水」によって消される。反社会性を火によって象徴するのは、燃え盛り、焼き尽くす火が多くの場合、戦いや革命を連想させるからである。

よつて、むすこも物くさ太郎も、自分たちを笑っていた者に対して、価値の逆転によって立場を反転させ、それによって「再生」し、既存の社会に対して痛烈な批判を加えているのだと思われる。

おわりに

以上、「こわがることをおぼえるために旅にでかけた男の話」について、類似作品「物くさ太郎」との比較によって分析してきた。しかし、注意しておきたい点は、主人公たちが「再生」したからといって、これらの物語をグリム童話の中で特徴的な成長物語に分類することは不適切だろうということである。彼らは確かに試練を乗り越え、社会的に高い地位を手に入れるが、それは彼らの本来の力が発揮されたためであって、二人の行動からみても、新しい能力を手に入れたことにより大きな成長が果たされたとはい難い。彼らに対して他者からの助言はあったが、それは単に物語を次の展開に持っていくためのものに過ぎず、彼らがその助言によって納得したり、諭されたり、自身の行動を制限したりすることは特にみられなかつた。したがって、むすこも物くさ太郎も、自分のもともと備わっていた実力を発揮して地位を手に入れたのであり、この立場の逆転という帰結は、むしろ読者の価値観の逆転を意図していると考えられる。

それは同時に、「社会の常識」に対して警告を喚起しているといえる。たとえば、「こわがることをおぼえるために旅にでかけた男の話」において、旅に出るむすこに父親が渡した50ターレルのお金が特別役に立つことはなかった。これは社会の金銭第一主義の価値観を否定していると理解できよう。

冒頭において、本来のグリム童話は「語りで読まれる昔話」という性質を持っていると述べたが、「こわがることをおぼえるために旅にでかけた男の話」は、読者への挑戦、つまり社会における既存の価値観への挑戦、という面からみると、弱い立場にある民衆の声に寄り添い、彼らの考えを反映し表出している物語であるといえる。そのあり方は、「語るものとしての昔話」に最もふさわしいあり方といえるのではないだろうか。「笑い話」が好まれる理由のひとつには、この民衆側に立った視点があり、だからこそグリム童話のほぼ半数を「笑い話」が占めているのだと思われる。また同時に、民衆の「声」が託された「笑い話」の中にこそ、民衆の世界観の表現という昔話の真髄をみて取ることができるのである。

註

- (1) 相澤博『グリムの笑い話』NTT出版、1991年、8頁。
- (2) 小松和彦『神々の精神史』北斗出版、1985年、116～150頁。
- (3) 京都大学電子図書館<http://edb.kulib.kyoto-u.ac.jp/minds.html>
- (4) 小松和彦、前掲書、131頁。
- (5) 小松和彦、前掲書、119頁。
- (6) 金田鬼一 訳『完訳 グリム童話集（一）』岩波書店、1979年、52頁。

テキスト

金田鬼一 訳『完訳 グリム童話集（一）』岩波書店、1979年

参考文献

- 小松和彦『神々の精神史』北斗出版、1985年
相澤博『グリムの笑い話』NTT出版、1991年
小澤俊夫 編著『昔話入門』ぎょうせい、1997年
小澤俊夫『「グリム童話」を読む』岩波書店、1996年

(レポート担当教員 桑原ヒサ子)